

《京都》御所と離宮の栞

(おり)



其の十四

— 京都御所 —

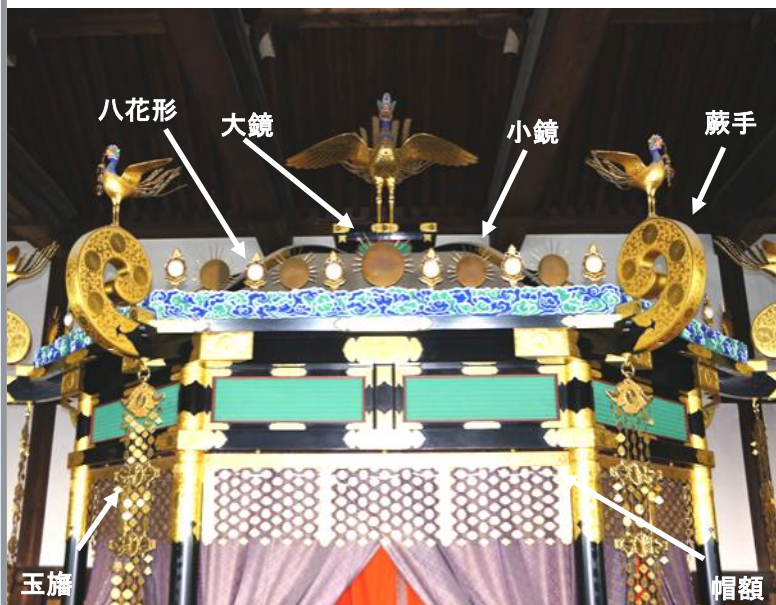
たかみくら

高御座 — 古代より継承されてきた特別な御座 —



高御座

(上: 全体写真, 下: 上部部分写真)



八花形

大鏡

小鏡

蕨手

玉旛

帽額

呼ばれました。天蓋裏の中央(御椅子の真上)にも、大円鏡といわれる鏡があります。

天蓋の八方の先端にある蕨手には玉旛(金物製の旗)をつり下げ、柱間には帽額(帳の掛け際の装飾)を掛けます。玉旛と帽額には、金色の文様飾りの間に、五色(白(透明)・黄・赤・緑・青)の小さな玉が配されています。五色の玉や日形および鳳凰は、天皇が即位などの儀式の際に身につけた冕冠(江戸時代以前、礼服を着用する際に使用された唐風の冠)にも用いられており、重要な儀式には欠かせない装飾であったとみられます。

京都御所の正殿である紫宸殿の母屋中央には、高御座が置かれています。高御座は、奈良時代以来、即位式や朝賀などの重要な儀式に用いられてきた天皇の御座です。現存の高御座は、今から百年前の大正4年(1915)11月10日の大正天皇御即位式に際して新造されたものです。昭和天皇と今上陛下も、即位式にはこの高御座にご登壇になり、今上陛下の即位式の際には、京都御所から皇居宮殿に移送して用いられました。高御座は、古代から現代に至るまで、大切に使い継がれてきた調度なのです。

高御座は、南を向き、四角形の浜床の上に、八角形の壇(二段)を重ね、その壇上に柱を立てて、天蓋を支えるつくりになっています。

高御座の特徴である八角形については、
「大八嶋国」、「八隅」と呼ばれた日本の国土をあらわしているという指摘があります。

高御座の上には、頂上に大鳳一つ、八方に小鳳が載ります。天蓋のまわりには瑞雲が画かれ、その上には大小の鏡と白玉を入れた八花形が並びます。
なお、鏡には周囲に十五本の光芒があり、日形とも



高御座帳内の様子



敷物の様子

とばり ふかきむらさきいろこあおいがたのあや ひいろのはく
柱間には帳(表: 深紫色小菱形綾, 裏: 緋色帛)を掛けま
うんげんべり やまとにしきべり
す。帳内には、天皇の御座として、纒縹縁畳二帖、大和錦縁
りゅうびんのつちしき やまとぜいきんのたんたい どうぎょうきのたんたい
龍鬘土敷一枚、大和軟錦毯代一枚、東京錦毯代一枚を重ね
とりいしきちよくほうけいもくめ ろういろ
て敷いた上に、鳥井式直方形空目蠟色塗り螺鈿入りの御椅子
を立てます。御椅子の座面上には、纒縹縁の畳と白地菱文の
おしとね
御茵を重ねます。これだけの敷物を重ねられることは大変珍し
く、伝統的な御座のあり方を考えるうえで、重要な特徴であると
いえます。御椅子両側には剣璽案(向かって右に剣, 左に勾
玉)があり、その手前に御璽・国璽を置くための案があります。



敷物詳細

(左より東京錦毯代, 大和軟錦毯代, 大和錦縁龍鬘土敷)

高御座に関する記録は、天平16年(744)までさかのぼります。高御座は大極殿(大内裏の中心である朝堂院の正殿)での儀式の際に置かれていました。12世紀後半における大極殿の焼失後、大極殿の儀式は紫宸殿等で行われるようになり、高御座も建物の大きさに合わせて浜床を小さくするなどして、紫宸殿等に置かれるようになりました。高御座の形式について詳しい『延喜式』(平安時代中期の法典)以降の史料を確認すると、装飾の数や浜床の大きさなどに変動があるものの、基本的なかたちには大きな変更が加えられることなく現在に至ることがわかります。このように古来からの形式が継承される一方で、座具には変化がみられます。上記の史料によると、即位式等の儀式における高御座の御座は、平敷(床座)であったと解されます。例えば、『延喜式』には上敷両面二條、下敷布帳一條と記され、平安時代末期の儀式装束を示す『文安御即位調度図』にも纒縹端大帖一帖、唐錦端龍鬘、唐軟錦端茵、東京錦茵を敷き重ねると記されています。また、江戸時代の『後桜町院天皇宸記』には、畳二帖と茵三枚を敷くことや、平敷の高御座にご登壇になる際の所作について記されています。大正時代以降、即位式において高御座に御椅子が立てられるようになりました。現存の高御座は、一代一度の即位式に用いられる御座として、古来からの伝統を継承しつつ、時勢に応じた変化が加えられた特別な調度なのです。

今回紹介した鏡(日形)、帽額、剣璽案、敷物(東京錦毯代ほか)を以下のとおり展示します(大正天皇御即位式使用)。
京都御所秋季一般公開
平成27年10月30日(金)～11月3日(火・祝)
於: 大臣宿所(P8地図参照)